

にほんご人フォーラム 10年のあゆみ



Decade of Japanese Speakers' Forums

公益財団法人かめのり財団 独立行政法人国際交流基金 共催事業

「にほんご人」とは

「にほんご人」とは、国際社会において日本語を使って何かを達成したいという意思を持ち、そのために日本語でコミュニケーションをする人々の総称。日本語を使って、議論し、協働できる「にほんご人」が増えることは、21世紀の日本にとって大きな意味を持っています。

にほんご人フォーラム 10年のあゆみ

にほんご人フォーラムとは	3
10年を振り返って	4
佐藤 郡衛 独立行政法人国際交流基金 日本語国際センター所長	
金田 智子 学習院大学 文学部教授	
集合フォーラム	7
教師プログラム	8
生徒プログラム	10
蒔かれた種が、世界で花開く日を願って	13
横田 淳子 東京外国語大学 名誉教授	
教師参加者インタビュー	14
生徒参加者インタビュー	16
10年のまとめ報告会	19
パネルディスカッション 教師セッション	20
パネルディスカッション 生徒セッション	22
各国関連事業	23
にほんご人フォーラムと歩んだ10年、 そしてこれから	30
西田 浩子 公益財団法人かめのり財団 常務理事	
数字で見るにほんご人フォーラム	31

【別紙】

にほんご人フォーラム 年表/アンケート調査/にほんご人フォーラム関連の主な論文等

にほんご人フォーラムとは

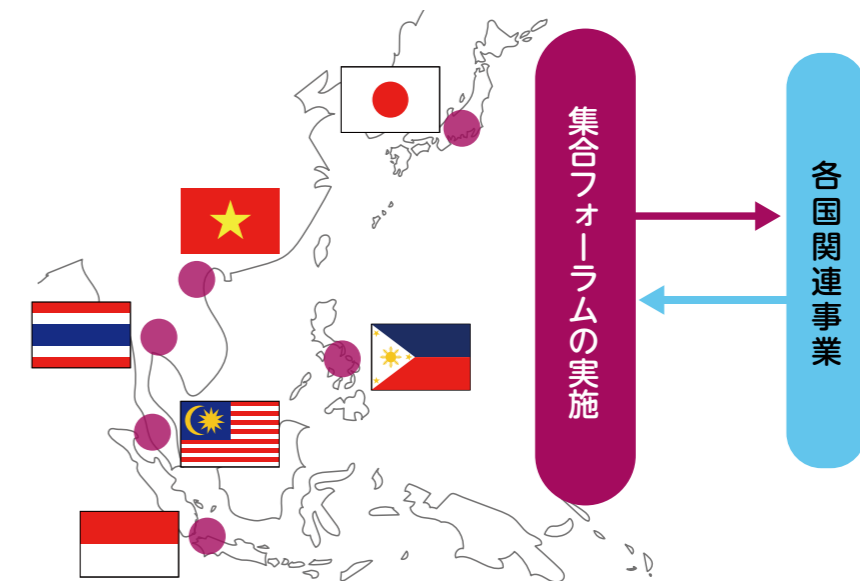
にほんご人フォーラムの目的

- ① これからの社会を生きる世代に求められる能力の育成を目指した
外国語教育のアプローチの共有と実践
- ② 中等教育におけるにほんご人ネットワークの形成
- ③ 若い世代の相互理解の促進とグローバル人材の育成

にほんご人フォーラム (Japanese Speakers' Forum/略称JSF) は、公益財団法人かめのり財団と独立行政法人国際交流基金が共催した、10年間にわたる事業です。JSFは、「集合フォーラム」と「各国関連事業」で構成されています。集合フォーラムは、東南アジア諸国で日本語を学ぶ高校生と日本語教師、日本の高校生と高校教師が一同に集まり、日本語を共通語として、交流・研鑽する場です。集合フォーラムは「生徒プログラム」と「教師プログラム」からなり、いずれも、これからの社会に求められる21世紀型スキルの育成を目指しました。

そして、集合フォーラムでの学びをそれぞれの国の中等教育に活かせるよう、各国での「関連事業」が行われました。

にほんご人フォーラムの全体像



▶集合フォーラム P7~P12 ▶21世紀型スキル P18 ▶各国関連事業 P23~29

10年間の成果を踏まえて 新たな一歩を

「にほんご人フォーラム」の10周年、おめでとうございます。1つのプロジェクトが10年続くということは容易ではありません。主催してきたかめり財団の関係者各位に敬意を表したいと思ひますし、共催者としても大変うれしく思ひます。

私は、2020年4月に国際交流基金日本語国際センターの所長に就任しましたが、この「にほんご人フォーラム」を最初に知ったのは就任前のことです。「にほんご人」というネーミングのユニークさでしょうか、興味を惹きつけるものでした。インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナム、マレーシアの東南アジア5カ国を対象にしているのも先見の明があるように思ひました。東南アジアでは日本語学習者数が増加傾向にあり、日本文化や日本への興味・関心も高まっていたからです。近年の日本国内の在留外国人の数をみてもこの5カ国の人が増加しています。東南アジアでは今後も日本語教育が大きく発展する可能性があり、特に若い世代に対する日本語教育はますます重要になります。

「にほんご人フォーラム」の特徴は21世紀型スキルの育成を目標にしている点にあります。中等教育レベルの交流活動はともすると

交流自体が自己目的化し、「活動あれど、思考なし」という問題を抱えることになります。その意味でも交流活動を通してどのようなスキルを育成するかは重要です。この事業は交流活動を通して日本語能力はもちろんのこと、思考力、表現力、チームワーク力などの育成を目指したものになっています。国際交流活動と日本語教育を統合した取り組みだといえます。

ただ、2020年を境に世界が大きく変化しつつあります。地球温暖化による世界規模での自然災害の多発、新型コロナウイルス感染症のパンデミック、世界情勢の不安定化など、これまで想定しなかった事態に突入しました。国際交流や異文化理解は、新たに多文化共生、交流を通じた新しい価値・文化の創造、さらに世界に共通する課題の学習といった視点が必要になっています。この事業が日本語教育を軸にしつつも、多様な取り組みを展開することでこれからのアジア地域を担っていく人材、さらにはグローバルに活躍する人材の育成につながっていくように思ひます。今後の益々の発展を期待しています。



独立行政法人国際交流基金 日本語国際センター所長

佐藤 郡衛

東京学芸大学教授、東京学芸大学理事・副学長、目白大学学長、明治大学特任教授などを経て、現在、国際交流基金日本語国際センター所長、東京学芸大学名誉教授、目白大学名誉教授。

10年を振り返って

これまで10年間に渡って「にほんご人」を育成した「にほんご人フォーラム(JSEF)」は、どのような成果を生み出してきたのでしょうか。日本語教育の専門家の立場から、JSEFのおゆみを振り返っていただきました。

10年間にわたる学びの連続

「あっという間だった」という表現を私たちはよくしますが、「にほんご人フォーラム」の10年間、そして、初年度から評価者として参加した集合フォーラム教師プログラムの10日間を、私自身はそれほど短くは感じていません。これは、10年間が自分の年齢に比べると長いものなのだ、というようなことでは全くなく、また、集合フォーラムが時計ばかりを見ってしまうようなつまらない10日間だった、ということでもありません。おそらく、集合フォーラムが毎年新しいテーマや課題に挑戦しており、参加者の取り組みの様子を見学するたびに、私自身、新たな学びを経験していたからではないかと思ひます。そして、その10日間の経験によって気づいたことや学んだことは、翌年の10日間を迎える時まで、さらにその後まで私の頭の片隅にずっとあり続けました。見学者ですらこうなのですから、参加者にとって、夏の10日間、そしてそれが核となって展開した何年間かは、よく勉強した、考えた、行動した、と振り返ることのできるものだったのではないのでしょうか。

「にほんご人フォーラム」が目指したこととその成果については、すでに他のページで十分に語られていると思ひますので、ここでは私自身がこの10年間の教師プログラムの見学を通じて感じたことについて書き留めておきます。

集合フォーラムの特長の一つは、生徒と教師の両方が参加している点です。それぞれのプログラムで課題を遂行しつつ、教師は時々生徒の様子を観察したり、話を聞いたりしま

す。教師は教師の役割を果たす機会があるわけですが、時には、教師は生徒と全く同じ課題に取り組みました。たとえば、2019年、ベトナム・ダナンでの「日本語劇」です。生徒も教師もそれぞれチームに分かれてシナリオを作り、上演するという経験をしました。同じ大変さを教師も生徒も味わうのです。

この課題に取り組む中で、教師自身も国や背景の異なる人と意見をたたかわせ、力を出し合いながら、そしてお互いを尊重して、一つのものを作り上げていきました。演出のための小道具や衣装があるわけでもなく、時間も限られる中、生徒も教師も同じ条件の下、そこにあるものを生かして演技をしました。同じ苦勞をしたこと、その中で、それぞれが創意工夫をして、舞台を作り上げていったこと、その姿を見せ合ったことによって、生徒も教師も、大変さを心の中で労いつつ、互いが発揮した力に感動したのではないのでしょうか。

私は、劇作りの過程の中で、人間の創造性や問題解決力、そして「にほんご人」としてのコミュニケーション力をあらためて実感しました。人にはこれだけの力がある、学ぶ力がある、それを信じて引き出す仕掛けがこのプログラムにはありました。余計なおせっかいはしない、指示したり教え込んだりしない、そういう姿勢が根底にあり、この時の集合フォーラムを企画した方々の創意工夫、人の力を信じる心に感心しました。そして、これはそれまでの「にほんご人フォーラム」の連続と成長があったからこそ、それがしっかりと実を結んだのだとも思ひました。

この10年の成果、生徒と教師がともに学ぶプログラムによる成果が、次の「長い」10年につながっていくことを願っています。



学習院大学文学部教授

金田 智子

コロンビア大学ティーチャーズカレッジMA及びEd.M。文化外国語専門学校、Earlham College(米国)、広島大学留学生センター、国立国語研究所を経て、2010年4月より現職。専門分野は、日本語教育、授業研究。言語教育実践誌『イマ×ココ』(年刊)編集。『にほんご人フォーラム』には初年度より外部評価者として参加。

にほんご人フォーラムの10年

にほんご人フォーラム (JSF) の始まりは、事業立ち上げに向けて行った2012年の準備会議でした。準備会議では、各国から日本に招いた指導的立場の教師が、プロジェクト・ベースド・ラーニング (PBL) を体験し、プログラム案を検討。これを踏まえて、2013年から本格的に事業がスタートしました。

第1フェーズ (2013~2015年)「これからの外国語教育の理念とアプローチの実践と検討」では、PBLの提示と実践、各国教育方針の理解と課題の共有を行いました。

第2フェーズ (2016~2018年)「これからの外国語教育の具体的教授アイデアの提案と検討」では、日本語教育を通じた21世紀型スキルの育成に向け、模擬授業の実施や評価ルーブリックの作成を行いました。

第3フェーズ (2019~2021年)「参加国の拡大・10年事業の検証と今後への提案」では、より深い理解と変容を促すため、21世紀型スキルの内容とその必要性を参加教師自身が考えるプログラムを実施しました。新型コロナウイルス感染症の影響で2020年の集合フォーラムはオンライン開催、2021年度は、各国の国際交流基金の専任講師・日本語専門家を対象に、規模を縮小した勉強会をオンラインで開催しました。

2012	準備会議
2013 2014 2015	第1フェーズ これからの外国語教育の理念と アプローチの実践と検討
2016 2017 2018	第2フェーズ これからの外国語教育の 具体的教授アイデアの提案と検討
2019 2020 2021	第3フェーズ 参加国の拡大 10年事業の検証と今後への提案



集合フォーラム

集合フォーラムとはどのような場だったのか、ベトナムで実施した2019年の様子为例にご紹介します。

集合フォーラム開催地



にほんご人フォーラム 2019 (ベトナム) 教師プログラム

21世紀型スキルを育む学習者主体のアプローチへ

2019年の教師プログラムは、第3フェーズの初年度でした。第1・第2フェーズの成果や振り返りを踏まえ、教科書を使用した通常授業で21世紀型スキルをいかに育成するか、その実践を考えました。「生徒が考え、生徒が学ぶ」「教師は教えず、共に学ぶ」という学習者主体のアプローチを、通常授業にどのように取り入れられるか検討を行いました。

2019年教師プログラムの目的

- ① どうして今後の社会を生き抜くために21世紀型スキルが必要なのかを改めて言語化し、生徒に伝える
- ② これまでJSFで実施してきた21世紀型スキルの育成を通常授業に入れ込み、その授業を自ら改善する

この年の教師プログラムでは、生徒へのフィードバックをプログラムに取り入れました。生徒が自らの学びや成長につながる言動をしたり21世紀型スキルを発揮したりしたときに、教師が気付いて生徒に伝えることで、生徒は励まされその力を伸ばしていけます。セッションの中で、生徒の長所を伝える「かがやきカード」を作成し、生徒に渡しました。

Sessions



「見る」セッション

生徒を観察し、生徒の21世紀型スキルや「かがやき」(生徒の長所・努力)、授業のヒントを探しました。



「話し合う」セッション①

「21世紀型スキルとは?」「そのスキルは2040年の世界でどう役立つ?」についてディスカッション。



「話し合う」セッション②

観察したことを話し合い、それぞれの考えを深めました。



「表す」セッション

21世紀型スキルの大切さを生徒に伝える劇を制作。生徒の長所と努力をフィードバックする「かがやきカード」も作成。

「伝える」セッション

生徒に向けて劇を上演。「かがやきカード」を生徒に手渡しました。



「作る」セッション

授業の活動案を制作し、ポスター発表とディスカッションを行いました。

教師の声

以前の私は、生徒が頑張っているところに目を向けず、できていないところばかり見ていたと思います。生徒の長所と努力にも着目することで、彼らはもっと頑張れるのだと気づきました。また、単なる意見交換のつもりで臨んだ「話し合う」セッションでは、他の教師との言葉や考え方の違いを感じることに。生徒が直面するコミュニケーションの難しさを私自身も経験する機会だったと思います。JSFを通じ、21世紀型スキルへの理解が深まりました。これからの授業では、日本語力の向上だけでなく、21世紀型スキルの育成も目指していきたいと思っています。

私は教師自身の学びの観点から生徒を観察したことはなかったので、参加前は心配でした。ですが、JSFで観察を繰り返し、生徒によって得意なことが違うと気づくことができました。JSFが他の研修と異なるのは、体験を通して学べる点です。劇を考えるグループワークでは、さまざまな意見を一つにまとめるのが大変でした。このように、教師としての観察だけでなく学習者の立場も体験することで、21世紀型スキルを学ぶ生徒の気持ちが分かったと思います。JSFに参加して考え方が大きく変わり、自分の気持ちをどのように相手に伝えたらよいか、考えるようになりました。

にほんご人フォーラム 2019 (ベトナム) 生徒プログラム

日本語を使って21世紀型スキルを養う

生徒プログラムでは、初めて出会う高校生たちが、各国1名ずつで構成される6名グループで活動します。国も文化もばらばらですが、「にほんご人であること」は共通です。2019年のプログラムでは、フィールドワーク等のインプットをもとに、劇の上演、1分間スピーチ、事後課題の形でアウトプットを行いました。また、ベトナム人日本語教師がファシリテーターとして、プログラムの進行やグループ活動の支援をしました。

生徒プログラムのテーマ

- 2013 便利
- 2014 便利
- 2015 思い込み
- 2016 日本のイメージ・日本人のイメージ
- 2017 いろいろな人がいることを楽しもう！
- 2018 にほんご人アドベンチャー inバリ
- 2019 ふるさと

生徒プログラムでは年ごとに設けたテーマに沿って、グループワークを行いました。2019年の生徒プログラムのテーマは「ふるさと」。ふるすとは、両親、祖父母、先祖から脈々と続く自分の土台です。これから広い世界へ旅立つ高校生たちに、自分の土台を見つめ直す機会にしてほしいという願いが込められています。

Schedule

1日目

グループに分かれてプログラムスタート。日本語で話し合います。



2日目

事前課題で考えた「『ふるさと』って何？」を共有し、ディスカッション。

3日目

ホイアンでのフィールドワークへ。日本人墓の見学や日本語を話す人へのインタビューで、「ふるさと」への考えを深めました。



4日目

講演会では、ベトナムに住む「にほんご人」の先輩に話を聞きました。



5日目

「ふるさと」をテーマにした劇の上演に向け、準備開始。シナリオからみんなで考えていきます。



6日目

生徒劇の上演会。ダナン在住の日本語学習者や教師、日本人もお招きして交流しました。



7日目

閉会式では、全員が1分スピーチを行いました。

生徒の声

事前課題の共有は、日本語でのプレゼンテーションを経験する良い機会でした。そして、みんなの発表を聞いて、すべての人が同じ意見を持っているわけではないと実感しました。同じテーマでも、人によって経験してきたことや文化がバラバラなので、捉え方は違うのです。劇の制作では、課題を達成するためには、違う人の意見も受け入れて考える必要があると学びました。日本語での議論についていくのは大変でしたが、他国の新しい友達ができただけでもよかったです。

私は普段、自分の意見を強く主張しすぎてしまう傾向がありました。ですが、みんなの意見を聞けばもっと良いものができるのだと、JSFで学びました。フィールドワークではいろいろな人に話を聞いて、人の考え方は一つではないと気づきました。様々なアイデアを組み合わせることで、素晴らしい意見ができあがります。劇も、みんなのサポートのおかげでできたと思います。

2019年集合フォーラム日程表

開催地：ベトナム（ダナン）

	生徒プログラム	教師プログラム
1日目 8月2日(金)		到着 アイスブレイク
		開会式
2日目 8月3日(土)	事前課題の共有 フィールドワークの準備 振り返り	「話し合う」「見る」セッション 生徒の振り返りのサポート 振り返り
3日目 8月4日(日)	フィールドワーク（ホイアン） ・日本人墓見学・にほんご人 Go! フィールドワークのまとめ 事前課題の共有、振り返り	「話し合う」「見る」セッション 生徒の振り返りのサポート 振り返り
	講演会準備	生徒の講演会準備のサポート
	ゲストスピーカーによる講演会、インタビュー	
4日目 8月5日(月)	講演会のまとめ 振り返り	「作る」セッション 生徒の振り返りのサポート 振り返り
	生徒交流会	
	演劇教室	
5日目 8月6日(火)	シナリオ作成 振り返り	「作る」「話し合う」「見る」セッション 生徒の振り返りのサポート 振り返り
6日目 8月7日(水)	劇の練習・準備 リハーサル	「表す」「話し合う」セッション
	生徒劇上演会、懇親会	
7日目 8月8日(木)	全体振り返り 閉会式の準備 自由行動	「表す」「伝える」セッション 生徒同士のフィードバックの観察
	閉会式、打ち上げ、教師劇上演	
8日目 8月9日(金)	帰国	生徒見送り 「話し合う」「作る」セッション 振り返り
9日目 8月10日(土)		「作る」「表す」「伝える」セッション 全体の振り返り
10日目 8月11日(日)		帰国

蒔かれた種が、 世界で花開く日を願って

にほんご人フォーラム（JSF）開始当初から関わり、すべての集合フォーラムに参加して評価を行ってきた立場から、10年間の感想を述べたいと思います。

JSFには4つの特徴があります。第1は、日本語力に差はあれ、東南アジアと日本の高校生を、日本語でコミュニケーションを取る高校生として同様に扱っていることです。第2は、生徒プログラムと教師プログラムを同時に行い、外国語学習の新たな教授法の可能性を実験しながら開発してきたことです。第3は、中等教育における日本語学習支援であることです。中等教育においては、各国の教育政策で掲げられた学習目標に沿う必要がありますので、各国の教育省との関係性が求められます。第4は、国際交流基金とかめのり財団の共催事業であることです。海外拠点事務所を持つ国際交流基金の力がなければ、JSFは成り立ちませんでした。

21世紀に入ってから各国政府は、これからの社会を生きるための資質、能力、スキルの教科横断的な養成を目標に掲げてきました。日本語教育でも、知識を中心とした教育だけでなく、自ら主体的に考える力、異なった文化や考えの人と意見交換する力、情報を効果的に取り入れ発信する力などの21世紀型スキルの養成が教育目標に加わりました。

しかし、そのような外国語教育法はまだ確立されておらず、現場の日本語教師にとっては未知のことでした。

JSFではまず、21世紀型スキルとは何か、それを日本語教育でどう教えるのかを検討しました。そして、教師が教師プログラムを通して、新しいアプローチを習得することを目指しました。生徒プログラムの中心には課題解決型学習（PBL）を据え、参加教師がそれを見学・観察することでPBLの利点を体得し、教師が教育アプローチを自ら変えていくことを期待したのです。

JSF関係者全員が、ときにぶつかり合いながら率直な討議を繰り返し、両プログラムは少しずつ成熟していきました。JSFは、参加生徒と教師だけでなく私を含めすべての関係者に、これからの時代の教育を考える機会を提供しました。全員にとって、課題解決型学習の場だったと言えます。

JSFで示された課題解決型学習は、新しいアプローチであり、絶対的なものではありません。しかし、その時点で最高・最善と思えるプログラムを、関係者全体で練り上げたものです。JSFで蒔かれた種が東南アジア各国で、そして世界各地で芽を出し、花開くことを願っています。

「JSF10年のまとめ報告会」(▷P19) でのご講評より



東京外国語大学名誉教授
(公財)かめのり財団日本語教育支援事業アドバイザー

横田 淳子

東京外国語大学留学生日本語教育センターで留学生に日本語を教えつつ、文部科学省が世界各国に派遣する日本の公立小中高等学校の日本語教師養成に携わる。その後、日本国内の外国人児童生徒の日本語教育問題の調査・研究を行い、教材を開発する。

教師参加者インタビュー

にほんご人フォーラム(JSF)集合フォーラムには、10年間で77名の教師が参加しました。参加した教師にとってはどのような経験だったのでしょうか。参加当時のことや今のご自身への影響について、4人の先生に伺いました。



2014年に初めて参加した際は、フィリピンの学校で英語とジャーナリズムを教えていました。帰国後、JSFで学んだ21世紀型スキル(クリティカルシンキング、コラボレーション、クリエイティビティ、クロスカルチュラルスキルズ)をジャーナリズムの授業に取り入れました。現在、日本で小中学生に英語を教える際も、21世紀型スキルの育成に意識を向けています。

ホセリート バイヤー ビセニオ 先生 Joselito Bayya Bisenio

フィリピン / 2014・2015・2017年教師プログラム参加 / アスコットインターナショナルスクールジャパン (神戸)

例えば、「道案内のポスターを英語で作らしましょう」とか「オリジナルサンドイッチのレシピを英語で書きましょう」といったクリエイティビティの活動を行っています。仮定法の授業では、「もしタイムマシンがあったら、●●に行きたいです」という文章を作る際に、「なぜそこに行きたいですか?」と尋ねて、クリティカルシンキングを促しています。JSFは、他の多くの教師研修と

異なり、知識を学ぶだけでなく、教師自身がアウトプットできることが魅力です。一番の利点は、教師同士のネットワークを形成できることです。ネットワークをより深めるためには、参加教師同士が繰り返し接点を持つことが重要だと考えています。

JSFでは教師プログラムと生徒プログラムを同時に実施してきましたが、別々に行う機会もあると良いかもしれません。生徒がいると、教師は自然と生徒に気を配ってしまうからです。私はもっと日本語力を向上させたら、またJSFに参加したいと思っています。



グエン ティ モンジップ 先生 Nguyen Thi Mong Diep

ベトナム / 2017・2018年教師プログラム参加 / 2019年ファシリテーターとして参加 / タイソン中学校 (ダナン)

ベトナムでは、クラスの人数が多く、グループワークがあまり行われていません。私は2017年に初めて参加した日本での教師プログラムで、グループワークの良さを知りました。帰国後、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターの日本語専門家からの支援を受けて、授業計画を立てました。JSFの高校生向けグループワークを、中学生向けにアレンジし、授業を行ったことが印象的でした。

2018年のバリでのプログラムでは、生徒プログラムを観察する時間がありました。生徒たちの発言や行動からアイデアを得ることができ、実際にプログラムを見ることができて良かったと思います。この経験を元に、帰国後も中学生に対して授業を行いました。45人のクラスを12のグループに分けて、日本語を使ったグループワークを取り入れました。ベトナムでは外国語を12年間も勉強しても話せない人が

多いと言われています。だからこそ、話す機会を作りたいです。

現在も私は授業でグループワークを取り入れています。JSFで出会った先生たちのことも生徒によく話します。彼らはさまざまな文化に驚きを持ち、興味を持っています。生徒たちには、「日本語で東南アジアの人と話してみてもいいですよ」とも伝えてあります。

他の先生にもぜひJSFを経験してもらいたいです。実際のコミュニケーションを経験することで、教科書通りに教えるのではない、より良い授業につながると思います。



フィオナ トー シュ チュー 先生 Fiona Toh Shu Chew

マレーシア / 2015・2017・2019年教師プログラム参加 / ミリ理科中等学校 (ミリ)

私は日本語を教えるようになって10年になります。JSFに参加して、たくさんのことを学びました。特にプロジェクトベースラーニング(PBL)に影響を受けて、今も多くのプロジェクトに取り組んでいます。自分の授業だけでなく、他の学校の先生に声をかけてPBLの導入について相談したりもします。

2019年のベトナムでの集合フォーラムでは、生徒たちの生き生きと学ぶ姿を見たことが印象的でした。以前は、生徒に不足

していることばかりを見つけようとしていたと思います。また、JSFからは私自身の人生について考える機会も得ました。2021年のオンラインフォーラムで「20年後の私」というテーマで生徒たちと話す中で、私は日々忙しくて夢を持つことを忘れていたことに気づかされました。

JSFの魅力は他の国の先生と交流できることです。国によって教師の個性や教育理念が異なり、刺激を受けます。私は現在働いている学校で唯一の日本語教

師ですが、JSFのネットワークがあるおかげで孤独を感じることはありません。

私はJSFに3回参加しました。最初は自分の日本語力を向上させることを考えていましたが、次第に教師としてのスキルを高めることに意識が移っていききました。JSFで学んだことをマレーシアの先生や他の国の先生と共有したいです。JSF参加教師のグループが、他の日本語教師のロールモデルのような存在になれたら素晴らしいと思います。



松山 美彦 先生 Yoshihiko Matsuyama

日本 / 2015年教師プログラム参加 / 市立札幌平岸高等学校 (札幌)

JSFでは、生徒たちが試行錯誤しながら困難を乗り越えていく姿が印象的でした。日本人同士なら伝わることも、他の国の生徒には伝わりません。しかし、日本人生徒がコミュニケーションを取ろうとする主体的な姿勢には、たくましさを感じました。JSFが安心して挑戦できる環境を提供してくれたからだと思います。

私自身も、大いに学びました。他国の先生と生徒の関わり方を見て、教師の適切な働きかけで生徒が変わることを実感しました。また、私のコミュニケーションの考え方も変わりました。真剣に相手と向き合えば、少しの誤解は解消すると信じるようになり、意見が違う人との会話に前向きになりました。今でもコミュニケーションで悩んだときには、JSFで

の経験を思い出します。

生徒がさまざまな国の人たちと一つの目標を達成する経験は、めったにできません。日本語を学ぶ人がアジアにたくさんいることを知るだけでも、大きな価値がありますが、日本語をコミュニケーションの手段として活用することは、人生を変えるような経験になると思います。特に公教育では難しいので、ぜひ続けてほしいです。また、過去にJSFに参加した生徒が、他の高校生に経験を発表したり、今後の研修で講師役として参加するなどの機会も良いのではないのでしょうか。

Interview 生徒参加者インタビュー

にほんご人フォーラム(JSF)集合フォーラムには、10年間で168名の生徒が参加しました。参加した生徒にとってはどのような経験だったでしょうか。参加当時のことや今のご自身への影響について、3人の生徒参加者に伺いました。



ヴァレン プレティシア さん Valen Pretycia

インドネシア / 2018年生徒プログラム参加 / 会社員

大学では、情報システムを専攻しました。高校生の時には日本語パートナーズと一緒に日本語を学びましたが、大学では学ばず、日本語学科の友達と一緒に自主的に勉強しました。

JSFでは、さまざまな国から来た友達から異文化を学び、同時に思いやりの心も育んだと思います。また、コミュニケーションスキルやクリティカルシンキング、意思決定力など、現代に必要な

なソフトスキルも身につけることができました。情報システムでは、プログラムに問題が発生した時に他の人の助けを借りたり、グループで課題に取り組んだりすることがあります。そういった場面で、JSFでの学びを活かすことができます。

生徒プログラムと一緒に参加した皆さんとは、その後、直接会うことはできていませんが、SNSを通じてつながっています。

日々「いいね」をしたり、コメントをしたりしています。みんな、住む場所は違いますが、気持ちの距離は近いと感じています。まるで家族のような関係です。パリで10日間を一緒に過ごし、そうした関係を築くことができました。何か困ったことがあれば連絡し合い、みんなが困っている時には助けになりたいと思っています。



チープチャノック エムオン さん Cheepchanok Yamwong

タイ / 2018年生徒プログラム参加 / チュラロンコン大学3年生

大学では、日本語を専攻しています。JSFは私にとって初めての海外経験でした。よく覚えているのは、パリ舞踊のワークショップやフィールドワークです。みんなでビーチに行ったことも良い思い出です。でも一番印象に残っているのは、交流会でさまざまな国の遊びをしたことです。タイ人のグループはタイのダンスを踊ったり、タイの楽器を演奏したりしました。

JSFでは日本語を話すというルールがあったため、日本語があまり上手なかった私にとっては大変でした。しかし、同じグループの他の国のメンバーがたくさん助けてくれました。JSFの経験を通じて、もっと上手に日本語を話せるようになりたいと思います。帰国後はタイで一生懸命勉強するモチベーションになりました。

コロナの影響もあり、他の国

の友達とはSNSでやり取りするだけですが、タイ人の友達とは実際に会っています。みんな日本語を勉強しており、勉強や大学生活のことなど、いろいろな話題で交流しています。

JSFでは多様性と寛容さを学びました。最初は言葉の意味がわからなかったのですが、「柔らかい心」と教えてもらって、オープンマインドであることだと、だんだん理解できるようになりました。JSFに参加して、私の考え方は大きく変わったと思います。



渡邊 優花 さん Yūka Watanabe

日本 / 2015年生徒プログラム参加 / 会社員

英語が苦手だったため、日本語なら大丈夫かもしれないと思い、JSFに参加しました。しかし、派遣前の研修で「東南アジアの生徒に向けて、鎌倉時代についてスピーチする」という課題が出され、全くできませんでした。私たちが話している言葉をそのまま伝えても、みんなには伝わりません。私がネイティブスピーカーの英語を聞き取れず、「早い」

「怖い」と感じるように、みんなも同じように感じるのかもしれない。日本語のネイティブスピーカーである自分自身を認識することができました。

就職活動の際には、やさしい日本語を学んできた経験を、「私は日本語と“日本語”のバイリンガルです」と話しました。熱意を持って日本語を学んでいる東南アジアの人々がたくさんいるこ

とを、JSFに参加するまでは知りませんでした。日本語とやさしい日本語が話せれば、たくさんの人とつながることができるのだと、JSFで実感しました。

JSFで出会った人々とは、今でも会ったり、SNSでやり取りしたりしています。お互いの近況をなんとなく把握しており、何か聞きたいことがあれば気軽に連絡できる仲間です。このような関係はなかなか見つけることができず、とても貴重だと思います。



これからの社会を生きる 世代に求められる能力 「21世紀型スキル」

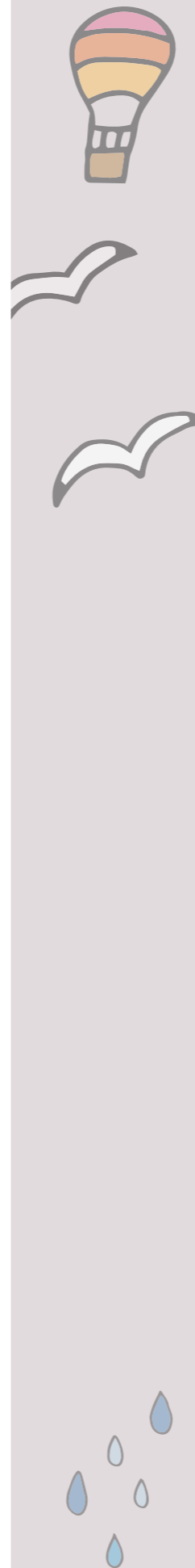
にほんご人フォーラム (JSF) が掲げる3つの目的の中に「これからの社会を生きる世代に求められる能力」という言葉があります。どのような能力を指すのでしょうか。

これは、国際団体ATC21S (Assessment and Teaching of 21st Century Skills) が提唱した「21世紀型スキル」と重なります。21世紀型スキルは次のように定義されています。*

- ① 思考の方法：創造性とイノベーション、批判的思考・問題解決・意思決定、学びの学習・メタ認知
- ② 働く方法：コミュニケーション、コラボレーション (チームワーク)
- ③ 働くためのツール：情報リテラシー、ICTリテラシー
- ④ 世界の中で生きる：地域とグローバルの良い市民であること (シチズンシップ)、人生とキャリア発達、個人の責任と社会的責任 (異文化理解と異文化適応能力を含む)。

JSFは、参加生徒がプログラムを通して21世紀型スキルを発揮することを目指しました。そのために取り入れられたのが、プロジェクト・ベースド・ラーニング (PBL) です。PBLは、生徒が自ら見つけた課題をプロジェクトとして取り組み、課題解決能力を身につける能動的な学習手法のことです。JSFではグループワークによるPBLを通じ、21世紀型スキルの育成に取り組みました。

※ P.グリフィン, B.マクゴー, E.ケア (編)、三宅なほみ (監訳)
『21世紀型スキル: 学びと評価の新たなカタチ』北大路書房



10年のまとめ報告会

日程：2023年2月19日 (日)
会場：コモレ四谷タワーコンファレンス
参加者：会場33名、オンライン59名

プログラム

挨拶 / 佐藤 郡衛 国際交流基金日本語国際センター所長
「にほんご人フォーラム」のあゆみ / 中尾 菜穂
「にほんご人フォーラム」の今 / 新谷 知佳

パネルディスカッション / モデレーター：金田 智子 学習院大学教授

【生徒セッション】

ヴァレン プレティシア (インドネシア)

チープチャノック エムオン (タイ)

渡邊 優花 (日本)

【教師セッション】

ユニ スサント (インドネシア、マダラ第1専門高校)

ドゥアンチャイ チョントナーコーン (タイ、シーナカリンウィロート大学付属パトムワン高校)

ホセリート バイヤー ビセニオ (フィリピン、アスコットインターナショナルスクールジャパン)

グエン ティ モン ジップ (ベトナム、タイソン中学校)

フィオナ トー シュ チュー (マレーシア、ミリ理科中等学校)

松山 美彦 (日本、市立札幌平岸高等学校)

講評 / 横田 淳子 東京外国語大学名誉教授

挨拶 / 西川 雅雄 かねのり財団常務理事

肩書きは当時

10年のまとめ報告会
パネルディスカッション
教師セッション



金田：JSFへの参加前後で生徒に変化はありましたか。

ドウアンチャイ チョンタナーコーン（以下、ドウアンチャイ）：私の生徒はJSFに参加して自信がついたそうです。卒業後も日本語を勉強していて、仕事で日本語を使うことがあると話していました。

グエンティ モン ジップ（以下、ジップ）：グループワークが難しかった生徒も、参加後はスムーズにできるようになりました。他の生徒にも影響を与えています。

ユニ スサント（以下、ユニ）：インドネシアの生徒は日本語能力が上がりました。N5からN4、N3へと進めたのはJSFのおかげです。

フィオナ トー シュ チュー（以下、フィオナ）：私の生徒はモチベーションが上がって、私のアシスタントになってくれました。

金田：教師としてのご自身にはどんな影響がありましたか。

ジップ：参加後は授業を見直して、90%以上をグループワークでやるようになりました。

松山 美彦（以下、松山）：体験的な学びが生徒に変化をもたらすことを実感しました。それまでは、タスクの難易度が高いと、生徒は達成できないのではないかと心配していました。しかし、生徒たちがやり遂げる姿を見てからは、教師は生徒の可能性を信じ、サポートすることが大事だと考えるようになりました。

ドウアンチャイ：いろんな国の先生と知り合い、助け合えるようになりました。例えば私は2018年に、日本の先生を訪ねて日本の学校を訪問することができました。その他にも、各国の先生と今でも連絡していて、にほんご人のネットワークができました。

金田：JSFを続けるとしたら、変えずに残したほうが良いことはありますか。

ユニ：参加者の人数です。6カ国から生徒4人、教師2人はちょうどよい規模です。

ホセリト バイヤー ピセニオ（以下、ジョーイ）：教師プログラムと生徒プログラムは別々に行われますが、2017年には教師プログラムで作成したレッスンプランを生徒に向けて発表する機会がありました。異なる国の生徒たちの前で授業を行うことができたことはとても良い経験でした。

フィオナ：対面で行うこと、プロジェクトベースの学びを行うことが大切です。異なる考えを持つ人々が協力し、短い時間で問題を解決する経験は、参加者に強いインパクトを与えます。また、私は教師プログラムに3回参加して自信がだったので、教師プログラムも残してほしいと思っています。

ジップ：グループで授業の計画を作り、6カ国の生徒に実際に授業をして改善する経験は、大変でしたが、良かったです。

ドウアンチャイ：生徒プログラムも教師プログラムも両方とも大事です。生徒プログラムでは、日本など他国に行けることが生徒のモチベーションになっています。続けてほしいと思います。

金田：にほんご人のネットワークを発展させるために、何が必要ですか。

ジョーイ：集合フォーラムに参加していない生徒・教師も、ネットワークに入ることが大事だと思います。

フィオナ：賛成です。ネットワークとして、先生と生徒をサポートするヘルプデスクを設けられたら、一緒に問題を話し合ったり、解決したりできます。ネットワーク参加者に向けて、オンライ



ンコースを作ってもいいと思います。例えば、違う国の先生同士がオンラインで1つのチャンネルを持ち、あるトピックについて各国の文化を紹介したら、授業の参考になるのではないのでしょうか。

ユニ：インドネシアでは、にほんご人フォーラムの同窓会グループがあります。私たちも、国を超えて作ったらいい。定期的におしゃべりしたり、自分の経験話をしたりする場です。

金田：いろんな知恵ができました。JSFにおいて解決すべき課題はありますか。

フィオナ：参加教師が次はファシリテーターとして参加できる機会があると良いです。また、SDGsに関連したトピックを取り入れるのも良いアイデアです。世界は変化していくので、どのような人材を育てたいのか、先生方が考えることも大切です。

ジョーイ：私もそう思います。私は日本でALT（Assistant Language Teacher/外国語指導助手）をしていますが、日本の学校でもSDGsの授業がたくさんあります。

ユニ：環境問題や社会問題はいいと思います。生徒がその問題の実際の解決に取り組めるからです。

松山：JSFのありがたい点は、日本国内の地方の公立学校にも注目してくれることや、専門家からの継続的な指導です。課題は、体験的な学びを日常の学校生活にどう取り入れるかです。たとえば、掃除の時間前後に振り返りのための一言コメントを生徒に言ってもらうなど、体験的な学びを日常に導入するヒントが提示されると、さらに良い結果が広がっていくと思います。

ジップ：にほんご人をいかに増やしていくかが

課題です。私の生徒は、JSFを経て、日本語を自分の専門にできました。世界の若者にJSFを広げてほしいです。

ドウアンチャイ：それぞれの年のフォーラムの内容を共有してほしいです。ラーニングコミュニティがあったら、参加教師もずっと勉強できます。

金田：最後にこれからの夢を教えてください。

ユニ：生徒たちが日本語を勉強できるように、日本語学習のウェブサイトを作りたいと思います。

松山：かつて中国で日本語教師をした経験やJSFでの経験を、今の仕事に活かしていきたいと思っています。生徒が自分自身を表現し、相手の話に耳を傾けて自分の意見を形成する機会を作っていきたいです。

ジップ：コロナと戦争の心配をせずにみんなで生活できることが私の夢です。

ドウアンチャイ：にほんご人がこれからも増え、タイや他の東南アジアの国々と日本の関係がより親密になることを願っています。そして、引き続き架け橋となる活動をサポートしていきたいと思っています。

フィオナ：他の人に参考にしてもらえるような存在になりたいです。日本語教育に貢献できるように頑張りたいと思います。

ジョーイ：できるだけ長く日本に住み、日本語を上達させたいです。また、ラーニングリソースを作りたいです。JSFで発表したプロジェクトプランやアウトプットをインターネットに載せて、JSFフォーラムに参加した教師やスタッフ、生徒がいつでもどこでもアクセスできるようにするのが夢です。

金田：ありがとうございました。いろんなお話を伺えて、私も勉強になりました。

10年のまとめ報告会
パネルディスカッション
生徒セッション



金田：みなさんはJSFからどんな影響を受けましたか。

ヴァレン プレティシア (以下、ヴァレン)：私はコミュニケーション、コラボレーション、クリティカルシンキングのスキルを学びました。昨年、IT企業でのインターンプログラムに参加し、課題解決の提案に取り組みました。このときにもJSFで身につけたスキルを活かせたと思います。JSFに参加して、さまざまなにほんご人と出会えたこと、チームで協力して発表できたことが印象に残っています。

チーフチャノック エムオン (以下、チーフ)：私は2つの影響を受けました。1つは、日本語を勉強し続ける気持ちです。他の生徒は日本語が上手で、もっと勉強しようと思いました。もう1つは、21世紀に大切な「多様性と寛容さ」を教えてもらったことです。昨年、Instagramで勉強アカウントを始めました。JSFで学んだ多様性と寛容さについて、日本語を勉強しているタイ人向けコンテンツです。

渡邊 優花 (以下、渡邊)：大学生になってから、ベトナムで日本語交流会を開く学生団体に所属しました。長期休みはベトナムに滞在し、大学や日本語学校などで交流会を開いていました。他の東南アジアの国々にも興味を持ち、いろいろな文化に触れられたのも、JSFの影響です。

金田：生徒プログラムのときの仲間と、また何かできるとしたら何をしたいですか。

ヴァレン：みんなが今、何をしているか聞きたいです。それと、食事やカラオケをしたい。J-POPを歌いたいですね。

チーフ：雑談したいです。2018年に参加したとき、私は日本語をあまり話せず日本語能力試

験のN5レベルくらいでした。伝えたいことはたくさんあったけど、話せなかった。再び会えたら、雑談するだけでいいです。

渡邊：高校生だったみんなが成人しているので、これまでについて、お酒を交えて話せたら楽しいだろうと思います。生徒プログラムするとき、伝統衣装でのパーティーが楽しかったので、それもいいですね。

金田：どこでやりたいですか。

ヴァレン：日本がいいです。日本のカラオケに行きたい。

チーフ：私も日本がいいです。タイは暑いし(笑)。日本は自然豊かなので、ゆっくり友達と話せそう。

金田：これからの夢を教えてください。

チーフ：将来は日本語に関する仕事をしたいです。通訳者、教師、翻訳者、ガイド、なんでもいいので、日本語を使うチャンスがあったらやってみたいです。

渡邊：私が参加したときのテーマは「思い込み」でしたが、最近、思い込むことが増えてきたと感じています。柔軟な考え方ができる大人として、成長していきたいです。

ヴァレン：私の夢は2つあります。1つは、子どもの頃から音楽が好きだったので、お金を貯めてヨーロッパに行き、ミュージシャンになりたいです。もう1つは、JSFで思いやりを学んだので、思いやりで人を助けられるようになります。

金田：JSFでの経験が、みなさんの心に残っているのが聞いてよかったです。ありがとうございました。



各国関連事業

集合フォーラムの経験を各国の教育現場へ

にほんご人フォーラム (JSF) では、参加した各国の日本語教育関係者が、集合フォーラムの成果や実践を自国に還元できるようサポートしました。

JSFに参加したASEAN5カ国では、約85万人が中等教育機関で日本語を学んでいます (2021年現在)。集合フォーラムに参加できるのは、毎年、各国4名の生徒と2名の教師にとどまりますが、個人の経験や成長をそれぞれの国の教育現場で活かしてもらえれば、より多くの若者の成長につながります。そこで、国際交流基金の海外拠点が中心となり、JSFの関連事業として各国独自のプログラムを展開しました。各国関連事業は、ベトナム以外の4カ国で実施され、参加者は、生徒1660名、教師874名 (2013～2022年) となりました。



各国関連事業



インドネシア

メイファイ パンゲラパン
国際交流基金ジャカルタ日本文化センター 専任講師



インドネシアではJSF関連事業として、2014年から集合フォーラム前の事前ワークショップを、2016年以降はそれに加えて「ミニJSF」を行ってきました。また同年からテーマやアウトプット形式などを、集合フォーラムに近い構成にしています。これまでに参加した生徒は311名、教師は145名になりました。

JSFは、インドネシアの中等日本語教育に大きな役割を果たしたと感じています。集合フォーラムに参加した生徒は、日本語や日本文化に対する興味や学びのモチベーションが大きく向上しました。教師にとっても、他国の教師との交流を通じて自らのクラスを振り返り、日本語教師としてレベルアップする機会になっています。教師には、事前ワークショップやミニJSFのファシリテーターを

してもらっているのですが、準備が大変だとわかっていても、やりたいと言うのです。それだけの魅力があるのでしょう。

JSFでなにより大きかったのは、教師がPBLを知ったことでした。座学だけではなく、学習者体験を含む体験を通じて学べたのが効果的でした。集合フォーラムに参加した教師は少ないのですが、たくさんの教師が事前ワークショップやミニJSFを経験できて、よかったと思っています。

ただインドネシアは広いので、ミニJSFをまだ行っていない地域も多く、PBLを体験したことがない先生もたくさんいます。ミニJSFをやると「私の地域にも来てください」「どうして私の地域ではやらないのですか」という声があるので、できるだけ多くの先生に体験してもらえたい環境を作りたいと思っています。



各国関連事業



フィリピン

フロリダ アンパロ アダラヤン パルマヒル
東京外国語大学 世界言語社会教育センター 特任講師(フィリピン語)

JSF関連事業として、国内フォーラム「JSF in フィリピン」を2013年から行ってきました。10年間で、生徒参加者は334名、教師参加者は176名となりました。JSF in フィリピンは、JSFの集合フォーラムと同様の構成で、日本語のブラッシュアップをしながら、21世紀型スキルについても学びます。また、教師はフォーラムの構成を観察して、カリキュラムの意義を考えたり、意見交換したりします。

教師はJSFでプロジェクトベースドラーニングを経験し、「言葉はコミュニケーションのためのツール」だという認識を持ったと思います。それから、教師も生徒も「日本語は、にほんご人(日本語を話す人)、つまり自分たちのアイデンティティ」だということにも気づいたと思います。JSFは、『enTree』[※]の実践の場だと言えますが、『enTree』に掲げられた21世紀型スキルとはどういうものかが、JSFを通じて具体的にになっていきました。日本語を使って目標を達成するイベントの形を、初めて教師に見せたのがJSFでした。

今後もJSFが、東南アジア諸国の高校生や教師の成長をサポートする場であり続ける



ことを期待しています。特に公立学校の生徒や教師に対し、世界を知る機会を与えていることに感謝しています。広い世界を見て様々な人と交流する経験は、新たな可能性の広がりや生活環境の改善へと導いてくれます。そして自分の人生を改善できる人は、他の人の成長をも助けられるようになるのです。開催形式が変わるとしても、日本語とともに学び、現代世代・将来世代の重要な問題を議論する場を提供し続けてほしいです。

※ enTree: 国際交流基金マニラ日本文化センターによる日本語教材『enTree? Halina! Be a NIHONGOJIN!』



各国関連事業



ベトナム

元国際交流基金ベトナム日本文化交流センター プログラムアシスタント(日本語教育担当) ヴォンリンチー



ベトナムでは日本語を、中学校から7年間勉強しますが、生徒が実際に日本語を使って交流する機会はほとんどありませんでした。教師も同様です。JSFの集合フォーラムに参加した生徒や先生は、大きな影響を受け、なかには帰国後に日本語フェスティバルを開催した教師や、日本語イベントで司会をした生徒もいます。また、集合フォーラムの帰国報告会には、DOET(ベトナムの各地方の教育訓練局)や学校の校長先生に参加してもらい、日本語学習に対する理解を深めていただいたと思います。

ベトナムではJSF関連事業は行っていないですが、中学生向けの日本語キャンプを行いました。中学生も、日本語での交流の機会は普段あまりありません。キャンプは日本語



の勉強ではなく、日本語を使った活動をテーマとし、チームワーク力を育成できて良かったと思います。

JSFや日本語キャンプが、ベトナムの中等日本語教育に影響を与えたとは言いがたいですが、教師と生徒、学校には影響があったと思います。他国の教師や生徒との交流を通じて、自分に欠けている点を見つけ、日本語学習や授業改善のモチベーションを得るからです。このようなプログラムに参加すると、文法や語彙を勉強するだけでは、不十分であることがわかります。JSFの参加者は、大学で勉強を続けている生徒や日本への留学生が多いので、日本語教育の海外普及にも役立つと感じています。このようなプログラムはぜひ続けてほしいです。生徒にとっても教師にとっても、日本語力だけでなく新しい友だちや情報を得られる、貴重な機会だと思います。

各国関連事業



マレーシア

エドワードリー チーパーン
マレーシア日本語協会 会長



マレーシアでのJSF関連事業は、集合フォーラムに参加する生徒の選抜を兼ねたワークショップや、集合フォーラムで参加教師が作成した教案を実施するワークショップ、勉強会など、年によって形を変えて行ってきました。参加した生徒は99名、教師は118名になりました。ワークショップで中心的な役割を担う教師(コア教師)にはアクションリサーチを課して、知識と経験を補完してもらったのですが、コア教師を担う人にはオフィシャルな資格を与えるなどの手立てがあっても良いのではないのでしょうか。

コア教師は6人もも活動的で、地域のことをよく考えています。ペナンの先生は日本語文化祭を開いています。ボルネオにいる2人は、1年に1回、中等学校で日本語を学ぶ生徒や先生のために、プロジェクトベースドラーニングのワークショップを開いていました。サワラクの先生は、文化イベント「ミリぼんフェス」を行いました。みんなオープンマインドで、よく考えている先生たちです。JSFは1度限りのイベントではないため、関係性を継続できたことがよかったです。失敗を振り返り、次に活かせるからです。マレーシアの日本語教育のためにうまく利用させてもらったと思います。

日本語教育で大事なものは、日本語によって自分は社会のために何ができるようになるのかが、わかることではないかと思っています。JSFは、かめのり財団、国際交流基金、国際交流基金海外拠点事務所の3つが連携して行うプログラムでした。よりシナジーを出せるとより良いプログラムになると考えています。



各国関連事業



タイ

プラパーセントーションスック
国際交流基金バンコク日本文化センター日本語部 主任講師



タイではJSF関連事業として、教師に向けた模擬授業と実践報告を2013～2014年に行いました。2015年からは教師、生徒のそれぞれに向け、キャンプを実施しています。教師キャンプや生徒キャンプでは、JSFの集合フォーラムで作成した教案を活用しました。そのためJSF同様に、教師は授業の進め方や今後の生徒に求められるスキルを育成することを考えるきっかけになったと思います。タイでの関連事業への参加者は生徒916名、教師435名となりました。

JSFは日本語教育だけでなく、中等教育のやり方に影響を与えたと思います。先生の役割とはなにか、どんな生徒になってほしい

のかなど、教育の考え方が変わりました。やはり教師がPBLを実際に体験することが大切だと思います。ファシリテーションのやり方がわからないと、どうしても教えてしまったり説明したりしてしまうからです。私自身、2012年のJSF準備会議に参加し学ぶ側を経験して大いに影響を受け、「教授法ブラッシュアップ研修」を体験型で行うようになりました。日本語学習を通じてさまざまなスキルを育成できるとわかったので、教材開発にも活かしています。研修や教材開発は、JSF教師参加者にも協力してもらいました。

生徒は、学習言語が使われる国に滞在すると、大きな影響を受けます。そのため、これからのJSFには日本での集合フォーラムを継続してほしいです。タイでは、国際交流基金と教育省が協働で、これからの社会で必要なスキルを育成することを意識した日本語の授業運営を考えるプロジェクトを始めており、発展させていきたいと思っています。



各国関連事業からさらに発展した事例

より多くの若者に、プロジェクトベースドラニングの学びを
「タイ国際日本語キャンプ」
「インテンシブキャンプ」

共催：タイ教育省、国際交流基金バンコク日本文化センター（JFバンコク）

タイでは各国関連事業がさらに発展し、教育省の事業との相乗効果が生まれ始めています。

JSFが始まった2013年、タイ教育省はJFバンコクと共催でキャンプ事業を開始しました。タイの生徒と海外から招いた生徒がともに過ごす「タイ国際日本語キャンプ」と、タイ国内の生徒が参加する「インテンシブキャンプ」が隔年で交互に実施され、JSF同様、外国語学習を通じた21世紀型ス

キルの育成を目指しました。

キャンプで活用されたのが、JSF参加教師が教師プログラムで作成した教案でした。参加教師はJSFから帰国後、教案を勤務校で実践し、ブラッシュアップ。国際キャンプ、インテンシブキャンプ向けにアレンジし、参加教師自身もキャンプのファシリテーターとして活躍しました。

また教育省とは2022年から、タイ中等教育のリーダーとなる日

本語教師を育成する「リーダープロジェクト」を開始しています。JSF参加教師の一部もこれに参加し、2年間のプログラムを受講。リーダーとなる教師には、地域の教師が日本語の授業だけではなく、生徒の能力の育成を授業に取り入れる際のアドバイザーになることが期待されています。こうして、JSFが取り組んできた活動が、より多くのタイの若者へと広まる環境が整いつつあります。

「タイ教育省とJSFとの関わり」

ノンシリ・チャーティラット様
元タイ教育省第2外国言語促進室 室長

教育省はこれまで、JFバンコクと協働し、様々な事業を行ってきました。生徒向けのタイ国際日本語キャンプ、インテンシブキャンプの他、日本語教師を対象としたキャンプや日本語ブラッシュアップ研修、教授法ブラッシュアップ研修を実施しました。また日本語教師養成プロジェクトや日本語教科書の作成にも取り組みました。

JSFに参加した日本語教師の先生方は、JSFで学んだことを活かして活躍なさっています。JSFが掲げる目的やJSFが参加教師に与えたミッションは、教育省が目指す方針と合致しており、JSFがサポートしてくださったことに感謝しています。今後のJSF集合フォーラムは、ぜひ日本で開催してほしいです。学習している言語の国で実際にその言語を使うと、学びが大きいからです。これからの取り組みに期待しています。

にほんご人フォーラムと歩んだ10年、 そしてこれから

「にほんご人フォーラム (JSF)」は、私に多くの出会いと学びをもたらした事業でした。

その始まりは、2011年に弊財団が受け取った多額の寄付です。海外における日本語教育に使ってほしいというご厚志で、日本語教育に対する知見を持ち合わせていなかった私にとって大きなチャレンジの幕開けでした。2012年には、東南アジアと日本の「学習者とともに行う教師研修」としての事業開始が決まり、独立行政法人国際交流基金 (JF) との共催も決定。同年の準備会議で登場したのが、「にほんご人」という新たな名称でした。当時決まっていたのは、地域 (東南アジアと日本)、対象 (中等教育レベル)、期間 (10年) のみです。今、10年を振り返れば、あえて目標を定めず「成長型、発展型の事業」とした意味がよくわかります。目標を決めていたら、そこがゴールになってしまっていたでしょう。

JFと弊財団は、組織文化も考え方も異なり、事業開始当初から課題と困難の連続でした。両団体は毎年、対話を重ね、ゴールがない中で取り組みを模索。常に迷い、悩みながら歩いてきた私にとって、アドバイザーの横田淳子先生からの「その時々で国際交流基金とかめのり財団が話し合っ『一番よい』と思うことをすればいいのでは」という言葉は、大きな支えでした。

事業を通して得た実りは、ここでは語り尽くせないほどです。まず教師のマインドセットが、「教えること」から「生徒自らが育つ手助けをする」ことへと変化しました。また、東南アジアと日本の教師、生徒、JF現地スタッフのネットワークが生まれ、支え合う関係性が育まれました。

そしてJSF参加者は、異なる文化との出会いを通じて自らが成長できること、その学びを自国に還元していけることに気づきました。各国の参加教師は、自国への還元を実践し、JF日本語国際センターをはじめとした日本語教育の専門家や現地の講師はその手助けをしました。還元の結果は、各国の中等教育レベルにおける日本語教育に表れ、各国独自の事業として花開いています。

今、10年を振り返り、JSFとは何だったのでしょうか。参加者たちは、これからの予測困難な時代を生きていきます。彼らが、日本語を通して「学び」、「考え」たことを「使い」、「共創し」、お互いに「つながり」、「育つ」場。自らの生き方にチャレンジする機会。そのような事業だったのだと思います。

さて、JSFは今後、JFとともに新たな模索をしていきます。国内外のJFの専門家や現地の講師が、悩みながらも事業のありようを考え、参加教師・生徒とともに今後の発展を生み出してくれることでしょう。そこには正解もモデルもなく、その都度考えることが成果につながると信じています。

最後に、寄付者の方々、事業実施に係る関係者の皆さんに感謝の意を表したいと思います。特に、この事業の企画立案に携わってくださった中野佳代子様、弊財団で事業を担当してくれた橋本成子様に心より御礼申し上げます。

公益財団法人かめのり財団 常務理事
西田 浩子

数字で見るにほんご人フォーラム

集合フォーラム参加者

(2013~2022年/延べ人数)

生徒
168
名

教師
77
名

集合フォーラム参加後、 現在も日本語を使っている

生徒
76.3%

教師
97.3%

にほんご人フォーラムへの参加が 「人生に影響している」と答えた人の割合

生徒
95.7%

教師
94.7%

アンケート調査の詳細は別紙をご参照ください

にほんご人フォーラム10年のあゆみ

2024年3月発行

協力：独立行政法人国際交流基金

発行：公益財団法人かめのり財団

〒102-0083

東京都千代田区麹町5丁目5番地

ベルビュー麹町1階

TEL: 03-3234-1694

FAX: 03-3234-1603

URL: <https://www.kamenori.jp/>

編集担当：近藤圭子

デザイン：イワブチサトシ (BUTI DESIGN)

印刷・製本：株式会社佐伯コミュニケーションズ

本報告書は、一般社団法人霞会館の助成を受け発行しました。

